

金沢大学におけるポータルと出欠管理端末のデータによる学生支援の試み

東 昭孝, 佐藤 正英*, 高田 良宏, †村田記, 森 祥寛, 松本 豊司

金沢大学総合メディア基盤センター

†金沢大学情報化推進室

*sato@cs.s.kanazawa-u.ac.jp

概要：問題を抱えた学生が講義を欠席しはじめ、その症状に教員が気が付いた時にはすでに手が付けられない状況になっていることもしばしばみられる。金沢大学では、そのような学生を教員が早期に気がつくことができる手助けとなるシステムを現在構築中である。本講演では、その概要について紹介する。

1 はじめに

新生が大学になじめずに引きこもってしまうことはしばしば見受けられる。また、入学直後の大学に慣れていない時期を乗り切っても、生活環境になじめなかったり、教員や同級生と良好な人間関係を築けなかったりして、精神的に問題を抱える学生も多い。学習意欲の減衰に始まり、学習不振となり、休学や退学する学生もいる。また、最悪の場合には学生が自殺しまうこともある。

問題を抱えた学生が自ら支援を求めることはまれであり、多くの場合は、誰にも相談せず1人で悩んでいる。最悪の結果を防ぐためには、早期にこのような状況に陥る傾向がある学生を発見することがまず求められる。

このような背景から、金沢大学では、学生情報を集約し、問題を抱える学生を早期に発見するなど、学生支援に役立てるためのシステム(以下、学生支援システム)を現在構築中である。本発表では、この概要について紹介する。

2 集約する情報

本学では多くの場合、授業開始後ある程度の時期が立った時に、各学類(学科に相当する学生の教育組織)で、授業担当者から出席状況を聞き、その情報を手作業で集計することで、大学に来ない学生を見つけることが行われている。この方法だと集計に手間がかかり、頻繁に集計を行うことは気軽にはできない。また、ある程度の時期に行うので、気が付いた時にはすでに引きこもり状態になっている可能性もある。

そこで、各教室に設置してある出欠管理端末

の情報と大学ポータルサイトへのアクセス状況、電子錠が設置してあるドアを通った場合の入退館情報、履修登録情報を自動集計し統合して提供するシステムとした。

本学では、平成23年度末にほぼすべての講義室に出席管理端末は設置でき、学生が学生証をかざすことで授業への出席が確認することができるようになった。教員が出席管理端末から得られる情報を出席情報として評価に反映させるかは別として、学生に出席管理端末に学生証をかざす習慣をつけさせれば、この情報を全ての講義について集約してみることで、学生がたまたま1つの授業を1回休んだのか、数日間の間連続して複数の授業を休んでいるのか容易に見ることができる。

また本学では、教職員も学生も全員が大学のポータルサイト(アカンサスポータルと呼ばれる)を利用せざるを得ない状況になっている。特に学生は、履修を登録したり、大学からの各種の連絡を見たり、それに返信したりするためにはポータルを見る必要がある。また、このポータルは学習管理システムへの入り口でもある。ポータルにアクセスしていないということは、大学での活動を全くしていない可能性が高いと考えられる。ポータルへアクセスすると、接続時刻の他、学内からのアクセス化、学外からのアクセスなども記録されるので、それらの情報を集計し、他の情報と統合して確認でき

るようにすることは有効と考える。

研究室に配属されると一般の講義の履修は多くなり、研究室での研究活動が主になる。研究室での人間関係がうまく行かなくなるなどの問題を抱えた学生が、研究室の他の構成員と接触を避けるような行動をとるために不規則な時間帯に大学に入退館する場合もある。このような学生も着目すべき学生と考えて、電子錠の入退館情報も集約すべき情報とした。

さらに、年に2度だけではあるが、きちん履修手続きをしているかどうかの情報も重要であるので、これも情報として取り入れることとした。

3 システムの機能

学生支援システムの機能は2つに分かれている。1つは、権限を与えられた者が、情報を確認したい時にいつでも情報を確認できる機能である。もう一つは、情報を能動的に閲覧していないとしても、注意すべき学生が出てきたときにそれを閲覧すべき者に送付する機能である。

閲覧機能では、様々な情報をグラフ化してできるだけ視覚的に容易に閲覧できる工夫をした。注意喚起の自動送付機能では、基本的には学類を単位として注意喚起を担当者に送付できるようにした。送付の基準は学類ごとに検討して決めてもらえるようにした。また、注意喚起機能では、いままで長期にわたり連絡が取れない学生がたまたま大学に来た場合などにも、注意喚起の警報が送付されるようにしている。

その他にも、なんらかの指導をした場合には、その指導の記録を自由記述できるようにして、学生指導の担当者が代わっても詳細な情報が引き継げるようにした。

4 問題点など

学生支援システムは現在開発中であるが、現状で考えられる問題もある。予想される問題のうち一番大きな問題が、情報源の一つに出欠管理端末の出欠情報を利用していることである。この端末は平成23年度末に全ての教室に整備されたばかりである。そのため、教職員の中には、これを利用するという意識がない教職員も

多い。また学生の中にも、教員が出欠を別の方法で取るか否かにかかわらず、大学に来たらこの出欠管理端末に必ず学生証をかざすという習慣がついているわけではない。この状況が続いていると、あまり厳しい注意喚起の送付条件を付けると、ひっきりなしに注意喚起が送付されることになり、結局は利用されない可能性がある。学生証による出席登録をするような指導をすることが重要である。

また、平成24年10月現在では、システムの詳細の機能が決まり、12月に完成に向けて開発をしている段階である。そのため、運用の詳細のルールはまだ明確になっていない。次年度からの本格利用に向けて、運用の詳細について今後早急にまとめることが必要である。

学内には学生の支援に役立つ(正確には、学生指導をする教員が情報を集める手間を省き、より学生の支援に力を注ぐことに役立つ)情報が多く存在する。例えば、図書の貸し出しや返却情報や健康診断の受診の記録、学生の各種の相談窓口の利用記録など、いろいろ考えられる。しかし、どの情報がプライバシーや収集することで学生に与える影響などを十分に検討しなければならない。これらをどのように取り入れるかなどは今後の課題である。